

賀川論文に対す論評

西 谷 正

縄文時代終末期において、黒色磨研土器が出現するころ、農耕具と考えられる打製の扁平石器、穂摘具と推定できる庖丁形石器、そして、調理具として使用しうる「すりうす」が出土する。これらの農耕関係遺物とともに、イネやムギの存在を示す資料も稀に伴うところから、縄文時代終末期における農耕の起源を論証し、その背景に大陸の黒陶文化の影響を考えてこられた賀川光夫教授が、縄文時代の生産技術、集落構造、宗教など、縄文文化全体の観点から、縄文時代農耕論に肉迫しようと努力されていることは、最近の、続々と発表される論文によってうかがうことができる。いまや、単なる農耕の存否問題に決別をつけ、農耕に対する全社会的・経済的な評価の問題へと議論を展開されている。賀川教授の一連の研究のなかで、このたび取り上げられた縄文時代終末期のカメ棺の問題も、そうした視点で構想されたものであるが、とくに、弥生文化の前段階という視角が強調されていることは注目される。まずもって、現在の日本の考古学界における縄文時代農耕論の第一人者といえる賀川教授の、積極的な姿勢と努力に、心からの敬意を表したい。

農耕の起源が、葬制にも何らかの変化をもたらしたことは想定できるが、そのことを、カメ棺の出現と関連づけている。縄文時代の各時期に種々の葬制があり、カメ棺もその一つであること、また、カメ棺そのものも、縄文時代の早期や前期に東北地方で出現し、中期になると、関東一帯にも広がっていることを認めながら、なぜに、西日本の後・晩期のカメ棺だけを定着葬法として位置づけ、その背景に、水稻以前の、畑作その他の定着農耕を主体とした生産活動を考えねばならないのか、その間の事情がわかりやすく説明されていない。

筏遺跡や小高野遺跡が、狩猟や漁撈よりも、むしろ、畑作に適した立地を示し、また、じっさいに、畑作を仮定する出土品のセットのあることは認められる。しかし、そのことがいかに論証されたとしても、農耕の出現がそのまま、カメ棺葬法を定着させる必要条件にはなりえず、ただ、十分条件にすぎないのではなからうか。つまり、農耕の開始が、いかなるメカニズムをもって、カメ棺の発生をもたらすのか、たとえば、地母神信仰によって説明するなど、その間の相関性にある種の論理なり原理が介在すれば、理解が容易になるであろう。私にとっては、何よりもまず、農耕の開始によって集落が定着化し、その結果、集落の一隈に一定の墓域が設定されたのかどうか、原始共同体という社会構成を反映して、群集墓あるいは共同墓地の形態をとつたのか否か、また、その構造をみると、性別・年齢などによって墓域が区切られ、そして、個々の埋葬の間に差異がなかったのか、等々の現象の必然性と存否問題について、じっさいの遺跡や遺物の状況から分析されることに最大の関心がある。

つぎに、カメ棺と農耕の起源は、西日本における弥生文化の発生と諸相をみるとき、きわめて重要であるという視点に関してである。カメ棺と農耕の起源に関する相関性についての方法論が呈示されない限り、縄文時代の農耕がたしかに弥生文化成立の前段階としての特別な意義は有しているとしても、農耕とカメ棺の両者が、ただちに、弥生文化成立の前提的条件にならないことは、さきに指摘したとおりである。「カメ棺は、弥生時代の葬法の一つとして西日本の特徴とされる」が、その場合とくに、水稻耕作開始後しばらく経った弥生時代前期末に成立し、中期になって飛躍的に展開する大形のカメ棺が、しかも、何十何百と群集することが特長であって、縄文時代のカメ棺とは直接的に結びつかない。弥生時代前期末に出現する大形カメ棺以前つまり弥生時代前期初頭の、カメ棺の実態を明らかにし、それが縄文時代のカメ棺とどういう関係にあるかを、まず検討する必要がある。その点については、弥生時代前期初頭のカメ棺の実例が少ない上に、詳細な分析も行なわれていない。とはいえ、隈昭志氏がすでに指摘されたように、北九州地域の弥生時代前期における、乳幼児の墓制としてのカメ棺を例にとってみても、縄文時代の遺制を踏襲している面が強いのである。乳幼児用と思われるカメ棺については、縄文・弥生両時代に共通してみられることを指摘するだけで十分であろう。弥生時代成立期の墓制を特色づけるものは、支石墓・箱式石棺墓・土壙墓などであって、それらの墓制が、前段階の縄文時代の終末期にどうであったか、また、その意味するところは何かを考えるべきではなからうか。

そもそも、小形カメ棺を問題としたところに、資料操作の点にきわめて困難な制約がありはしないだろうか。縄文時代後・晩期のカメ棺の大部分が小形であって、乳幼児用と考えられることである。一般的にみて、カメ棺は、新石器時代に入って、土器が出現したことによって、とくに乳幼児に日常使用の容器を転用して特別に葬ったものであって、新石器時代以来、近代まで、また、世界の各地で行なわれている葬制である。朝鮮無文土器文化の寿民洞、中国仰韶文化の半坡、メソポタミアウバイド・ウルク併行期のエリドゥ、エジプトの王朝以前の墓地、はては、アンデスインカ時代のカメ棺など類例をあげるときりがない。

西日本の縄文時代終末期のカメ棺の発生と相前後して、壺などの容器副葬がみられることも早くから指摘されているが、これとて、弥生時代前期へと継承されるものであって、小形カメ棺と類似した現象といえる。

縄文時代の墓制が、洗骨葬・火葬・胸部骨除去埋葬など多様であることは、後期の例を筏・浄土院・山鹿等々の遺跡の実例をもって、賀川教授が示されたとおりである。けれども、一般的であったのは、終末期にカメ棺の実例が100基を越え、ごんごいかに増加するとしても、おそらく土壙墓であると考えられる。カメ棺を西日本海岸地帯の一般的葬制と評価して議論を進めることには、なお検討の余地があるように思う。それゆえ、晩期における墓地の発見に際して、カメ棺が主体となるであろうという推測は危険であって、むしろ、土壙墓こそ追求すべきではないかと考える。土壙墓の検出は、じっさいにそう容易ではないが、西日本縄文時代の住居・墳墓などの遺構そのものの検出が少ない現状では、まして土壙墓の検出は困難である。その意味では、土壙墓からなる墓地のなかで、とくに乳幼児は、小形のカメ棺を使用したという考えにたつと、農耕開始以前に、カメ棺が

発生している可能性はじゅうぶんに考えられる。現に、全国的視野でいうと、たとえば、埼玉県黒谷貝塚で知られるように、幼児骨を入れたカメ棺が前期からみられることは、賀川教授も認められるところである。西日本においても、将来、そのような事例が発見されないという確証はどこにもないだろう。容器副葬についても同様のことがいえる。先土器時代においても、死者に食物などを供献したことは想像されるが、新石器時代の縄文文化においても、農耕によって収穫された穀物ばかりでなく、狩猟や漁撈によって獲得された食物が副葬されることは、十分に考えられる。その際直接死者に副えたり、土器に入れて副葬されることもあったろう。したがって、壺などの容器副葬についても、農耕開始以前にさかのぼることを予測しておく必要がある。

縄文時代後・晩期の島原半島や豊前平野の段丘上に立地する遺跡において登場してくる、群墓的性格について、弥生時代の前段階を考えさせるようであるという指摘についても、群墓そのものの実態や分析が明示されていないので、難解な感を脱いきれない。北部九州の弥生時代前期前半の墳墓をみると、数基あるいは数十基の土壘墓・支石墓・箱式石棺墓などが群集していることがあるが、共同墓地を構成する個々の墳墓の間には、稀に朝鮮製の磨製石剣・石鏃、小形壺を副葬品としてもっているものがある点を除くと、比較的等質性がみられる。一定の共同墓地のなかで、朝鮮製の青銅器を副葬したり、堂々とした木棺墓を採用するなど、副葬品や構造において顕著さが出てくるのは、前期も終末以後のことである。その点で、前期前半の等質な共同墓地のあり方は、おそらく、縄文時代からの連続性として把握できよう。そのような共同墓地の出現は、おそらく、農耕の開始などによる集落の定着化と無縁ではないと思うが、その点を強調するなら、農耕開始以前の集落と墳墓の実態との比較が必要となってくるので、資料の増加をまって、こんどの課題にしたいと思う。

二次的穿孔や底部打ち欠き法についても、死者の棺内での腐敗時期を短くするものという一元的理解には疑問を持つ。ことに、二次的穿孔についていうと、千葉県寒風貝塚で発見された洗骨葬と考えられる中期の大甕の底に穿たれた孔は、比較的古い例である。それ以後、晩期にいたり、さらに、弥生時代のカメ棺に及んで底部穿孔が認められるばかりではない。古墳時代の陶質カメ棺、奈良ないし平安時代初期の土師系火葬蔵骨器、そして、鎌倉・室町時代ごろの火葬蔵骨器にまで底部穿孔がみられるのである。縄文時代から室町時代にわたって、長期間にみられる底部穿孔の風習の背景には、その意義や機能も時代によって変容しているかもしれない。ただ、日常使用の容器を棺に転用するという仮器化のしるしとして、あるいは、排水や防湿の役目を果たしたという考え方もいっしょうではあるので、賀川教授のいわれるように、「二次的穿孔が加えられるということ自体、弥生時代の埋葬、カメ棺の特徴ということになる」かどうか疑問である。したがってまた、「西日本の縄文時代カメ棺が、底部を打ち欠き、二次的穿孔をみるのは、埋葬方法において、弥生式カメ棺の源流にあることを意味する」のかどうかもわからない。

いっしょう、朝鮮半島において、櫛目文時代の後半期に、アワ・ヒエ・キビなどの穀物を主とする原始農耕を想定する私の立場において、その時期の墳墓を明らかにし、それ以前の墓制あるいは無文土器時代の墓制と比較することは、大きな課題である。しかし、こんにち知られている櫛目文時

代の墳墓はきわめて少ない。そのなかでも、京畿道矢島貝塚の積石塚は、土壙に死者を埋葬した後、礫で覆ったものであるが、やはり、一般的には土壙墓ではなかったかと考えている。無文土器時代になると、全羅南道新昌里の53基に及ぶ小形カメ棺墓の群集は注目されるが、朝鮮先史時代のカメ棺の研究は、未開拓な分野といえる。

もう一つ、縄文時代晩期遺跡にみられる条溝について、これまでに知られているわずかな条溝の資料による限り、集落内での配置状況がわかるような資料に乏しいので、集落を仕切るものであるかどうかかわからない。仮りに、集落を囲繞したり、仕切るものであっても、弥生時代前期にみられる大規模なV字溝との間には、大きなヒアタスがある。縄文時代から中世にいたるまで、遺跡の発掘において、解釈のつかない条溝を発見することはしばしば経験するので、縄文時代の条溝についても、厳密なクリティークが必要であろう。

以上ふりかえてみると、縄文農耕論を葬制の面から追求しようとされた賀川教授の意慾的な研究に導かれて、批判に終始したきらいがあるかもしれない。しかし、そのことは賀川教授の縄文農耕論の補強と発展を念願するからに他ならない。過去数年ご指導をいただいている賀川教授への非礼は、切にご海容願いたく思う次第である。

(1974. 7. 16)